



『黄落』・(佐江衆一)の問い：文学と福祉についての仮説

著者	小倉 襄二
雑誌名	評論・社会科学
号	54
ページ	170-177
発行年	1996-03-20
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000002113

『黄落』^{こじゅうらく}・(佐江衆二)の問い

——文学と福祉についての仮説——

小 倉 襄 二二

MEMO — I —

いま、福祉領域についての情報は活字、映像などメディアのさまざまな媒体によって多様に展開している。私には多様化の果て、や、過剰ともみえてくる。取材の仕方、取材する人々の工夫、その切り口にも底がみえてきてなにを伝えたいのか、意味不明のものさえみうけられる。なかでも高齢社会の現実にとまなう情報は過激でさえある。

とくに介護保障のことが政策決定の段階になってこのあたりを軸にしての情報は肥大化しつつある。介護保険は介護費用の国民負担を普遍的に強制することになるから要介護の現実をあれこれと伝えて、だから社会保険方式による相当の費用拠出が必然なのだという論調になっている。いくらかこうしたや、強引な情報についての異議申立てはあってもマスメディアのこの主題について

の基調は変わりそうもない。やがて、私たちはこの強引な論旨を受容させられて相当の費用負担を強制される羽目になりそうである。こうした事態のなかで情報処理にあたって私たちの疑念やミスマツチをふくむ異議申立てはどこから提起されてくるのか、私にはよくわからないままではあるが情報に對置して記憶のレヴェルにその基底があると考えている。

記憶とはなにか。ここもよく視えないが一人一人の生活、自己史のようなもの、日常性をふくめてそれぞれの内奥に刻み込まれ、つみかさねられたもの、情念とでもいう外ない。情報と記憶は異質とみた方がいい。情報はそれぞれの記憶を触発する。交渉をもつ。一方で対抗したり、情報としていくら説得、説明されても記憶のサイドには違和感や異議申立てが出発することになる。情報科学、メディア学の領分ではすでにこうした相関については調べがいつているのかどうか怠慢でたしかめていない。

福祉領域の研究や実践にとつて異分野の方法や成果をとりこむことにあまりためらいはない。精神医学や心理学の各分野社会学科学の方法隣接の研究成果との関連をみても当然の対応である。情報と記憶のかかりから私が考えたいのはあらためて福祉研究と文学作品との関連である。文学作品も情報とみることができ

る。しかし文学作品、文学は作家によつて記憶を辿り、記憶の意味を状況設定によつて綴つたものといえないだろうか。文学作品に接していわゆる情報としてよみとることと、記憶を触発し、ある内奥からのさまざまな記憶への共感としてとらえることは異質の次元と考えた方がいい。文学、その作品は「記憶のもの」と割り切つた方がいいのではないか、一つの仮説である。

児童福祉と児童文学 障害福祉と差別や障害を扱つた文学。こゝうした対応での文学のジャンル、いくらでも相関をたどれば類別は可能である。とくに私小説、また風俗小説、歴史(時代)作品、劇作、詩、シナリオ、さらにルポルタージュ、ドキュメンタリー、随想のたぐいに至るまで際限もなく対応するジャンルは分化するかも知れない。そうした作業にはあまり関心はない。いずれにしても福祉の研究、探求にとつて文学のジャンル、それぞれの作品の描出したもの、その表現、プロットなどをとりいれて検討しようという試みは不在に近い状況である。しらすしらすのうちに扱つてきたことにはあるにちがいない。しかし文学作品のなかで福祉の研究者、現場の人たちがどこまで作品の方法、表現、描出されたものをその検証と解明を意識して位置づけてきたかは疑問であ

る。このあたりを特定の文学作品のなかで探求してみるのがこのメモの狙いである。

MEMO — II —

『黄落』(佐江衆一) (一九九五年五月三〇日刊・新潮社・初出誌「新潮」・一九九五年四月号)がこの福祉と文学のはざまに於いてのノートの著作である。この作品は公刊されてつよい衝撃、反響をひきおこした、すぐれた書評もいくつかみかけた。私は内容に惹かれていたが、書店でも手にとつていながら購入をためらつていた。さきに触れたように「老人文学」のたぐいがある。有吉佐和子氏の『恍惚の人』はいまのほけ老人についての象徴的、先駆的作品であつた。深沢七郎氏の『檀山節考』は著名、岡田誠三氏の『定年後』などの作品それぞれが「老人文学」ともいえる。日頃乱読する文芸雑誌にも「老い」を扱う作品は多くなつた。シモーヌ・ド・ボワヴワールの『老い』(朝吹三吉訳)は共感とその語り口の深さ、透徹、しなやかで、したたか、文明論としての目くばりと卓越にひかれてさきに小論にもしばしば引用もした。老いにかかわる文学作品はなるべく読むことにはしたが、『黄落』へのためらいに似たもの、それにこだわつて、自分の内奥をみつめての軽いショックがあつた。ここにきて、『黄落』という作品が提起したものの、その内容もよくわからないま、に直面することを避けていたのである。文学作品のそれぞれの情景、そしてその心象風景はいま、そして近い未来の自分にかさなつてくる。

作品を読んだのあれこれのゆとりや距離が喪失している。作品からうけるその切実さを避けているにすぎない。こうした途迷いは私人のものではないだろう。

この作品の目次をみると、五章の構成で、転倒、後光、黄落、葬送、老骨となっている。内容の全体は佐江衆一氏の身辺に生起した事実を素材としたフィクションとみえる。しかしフィクションとノンフィクションの境界も実はあいまいである。とくに私小説のたぐいにこのことがある。

「こんにち六十五歳以上を老人というから、私はまだ老人の部類ではないが、還暦を間近にしてちかごろ、駅の階段で時折つまずく。急に目の前が暗くなる、でも酔っているでもないのに、どうしたわけか爪先がひっかかって、前のめりによるける。慌てて身をもちこたえて思わずあたりを見まわし、転倒しかけた初老の男になど誰も注意をむけていないのに安堵しながら、自嘲とも寂寥ともつかぬ独り笑いを片頬に刻んでいる。」と書きだしている。どこで老いの兆し、それに想い至るか、髪は半白、老眼はすみ、歯根はぐらつく有様、そしてこれから自分を騙しだましあと三十年生きながらえて……の述懐にかさなる。みとるべき老親は父、九十二歳 母、米寿をひかえた八十七歳、そして私(作家)は徒歩十分ほどの近所にて老親は夫婦ぐらしである。その老いた母が洗濯ものを干しに出て梅が香をはこぶ微風に吹かれるように庭先の陽だまりにこけたのである。「転倒」この些事もみえる情景から修羅場がはじまる。すでに、四年前に、父が白内障の手術

で入院したときは、母は一人でこの家において、私の妻がきて世話をしたが、母は自分で食事もつくれたし、期間も一週間ほどだったからよかった。ところが肝心の母の転倒、骨折、入院、骨粗鬆症か、手術、人工骨を入れたりハビリだから今度はそうはいかない。妻がすべてをやることになる。明治生れの何事にも古い父は、一人息子の嫁がやるのが当り前だと思っているのだ。老父母の一切が私たちが初老をすぎた夫婦の上のしかかっている。冷えこみさびしく東の空にオリオン座が寒々と昇り、私も妻も一言も喋らず、たがいの靴音をさぐるように聞きながら夜道を歩いた」と情景描写がある。こうした描写にであうと私たちは、それぞれ思い至る―記憶にかさねて既視感(デジャヴユ)にさえ見舞われる。ここに文学者、この作家の老いの葛藤にまきこまれていくきっかけ、多くの人々の記憶にもつながる導入でもある。

ふとなにかをきっかけにみかけのそしてあやぶいくらしの均衡が崩れていく。外と内の両面にその危い均衡をつき崩す要因がひそんでいる。老母の転倒がことの始まりだった。転倒によって日常のたもたれたくらしのはこびはもろくも失調する。

老父との同居も感情のトラブルもあり家族の同意も困難、文筆稼業というや、時間にはばられない立場ではあるがほとんど老父、母の介護は妻の負担となってきた。両親が健在でどうにか二人で暮らせるうちは、手助けはするが出来ることは自分たちでやっってもらって、別々に生きてゆこうと私は決めていたというくらいのためかたも読みすすむとわかってくる。これも、住みわ

け「老いに処するくらしの知恵としてゆきわたったルールである。実は老人福祉といった援助過程はこの種のとりきめ、ルールが維持できなくなった瞬間と深く相関してくる。老親を初老をすぎた家族がみとる。その関係のまゝで老化がともに否応なく進行していく。これが「超高齢化社会」の現実とさかされている。この作品はひたむきな作家の眼を通してこの現実の一端というより集中表現した情景、その人々の揺らぎ、経過をひるまずに辿つてみせてくれた。高齢化社会、家族、福祉の主題の得難いケースレコードとして読むこともできるのではないか。

MEMO Ⅲ

「私」にも事故が加わる。作家本人の交通事故である。ここで葛藤はさらに深刻化する。加えて、この事故、入院することになるが会社勤めの忙しい次男、就職が決つて大学の卒業式をひかえた娘にも知られたくない。いっとき妻の胸のうちにだけおさめて夫婦でやり過せばすむことだ、これまでも私と妻とは、子どもたちとも一線を画して、そうした生き方をしてきた。こうした気づかない心くぼりもトラブルにあたつてのよくある情景である。そうした気づかい、心くぼりを押しきつて事態はさらに急速に悪化していく。

妻の腰痛、老母の火傷、ここで特別養護老人ホームやデイケアへの対応もでてくる。「後光」の章では老母の火傷の病院通いのなかで私がおぼつた姿をみてある老婆から「あなた、後光が

射してますよ」といわれたこと、私に後光など射しているわけではない。照れ臭いというより、悪い冗談だという気持ちだ。親孝行のふりをしているだけではないか。面映い気持ちと他人から見れば俺も捨てたもんじゃないという想いの交錯もある。こうした心象風景もみすごすことはできない。

そして、「私と妻は高齢の両親という蠅とり紙に絡めとられた蠅のようではないか、もがきながら、いがみあっている初老の蠅だ」という述懐もある。

さらに「黄落」に描かれた記述をケース記録風に辿つてみる。

「私」は兄が三歳で急死して長男同様の身、姉と妹の三人きょうだい。姉は六十八歳、子ども独立、孫あり、七十を過ぎた義兄と在所の二人ぐらし、七つ年下の妹、印刷業の手伝い、軀の不自由な姑と年老いた舅をかかえているという有様、老母の入院で、もはや老父母の生活のスタイルとテンポを乱さないようにと私と妻の十二年のはこびは崩壊する。そしてさきにふれた「私」の交通事故、入院、妻は老父のみとりに躍起になるがその間に恥しくていえないような老父との性、嫌味、耄碌のことがあつて私と妻の感情がこじれはじめる。妻の側にも八十三歳の老母がいてそれも重い負担と気がかりになっている。そして、すぐそこの闇に心身ともに疲れきつて眠っているのは、三十余年寄りそつてきた「妻」なのだろうが、私の知らない生きまものが、とぐろをまくようにして唸っている」と作家は描く、老母の入浴、トイレ、「おばあちゃま、かじりついてくる。」その負荷にたえず妻は執拗な

腰痛に苦しむことになる。市の公報をたよりに老人のための入浴サービスをたのむことになるが対象外と断られる。「老人いきがい課」のある自治体だが、この市では入浴サービスは介護者のいない独り暮らしのお年寄りか、家族に介護者がいても寝たきりのお年寄りで入浴介護が困難と認められた場合だという。「私」は、現に困っているんですと声を荒げ、自分の親を介護した経験がないだろうこんな若造に、六十にもなろうという男が高齢の両親と妻との間を右往左往している気持ちなどわかるはずがないのだ、と。結局、当面、デイサービス、それもひと月は待つ必要あり、「私」は怒鳴りたいのを抑える。施設でのショートステイ、それもベッドがかぎられ二カ月前、特別養護老人ホームに至っては審査して入所できるのは二、三年先ともきかされる。私の気落ちに気の毒に思った職員は、配食サービスとおぼしい週一回の昼食の弁当を自治会を通じて届けようかという。週一回の昼食だけですかといっていると小出しするようにこれも週一回のホームヘルパー派遣もあるなどわかってくる。情報化された(新)ゴールド・プランの本当の現実はこのレヴェルである。日経産業経済研究所の全国市町村を対象にした調査(九六年、一月十六日記事)では計画通り達成するのは困難とする回答は五割、計画どおり九九年未達成はわずかに二一%、困難は、財源、人材不足などを理由としている(全国三千二百五十五市町村にアンケート、千六百九十七の回答分析)の現状にみあった情景ともいえよう。

「私」はホッカホッカ弁当を老父母にとどける。老父は質屋だ

った。趣味に俳句づくり、私はしきりにデイサービスに二人でいくことをすすめる。配食はうけるが、ホームヘルパーは他人に家の中に入られるから厭だというので私は引き退った。その直後に老母は味噌汁の手鍋をはこんでいてつまつき火傷を負う。また妻の負担がかさなる。夫婦の想い、「私」の気持ちも矛盾していた。私の妻として老父母へ尽くして欲しいのだ。熱心にされすぎでは妻自身の身がもたないばかりか夫婦の仲がおかしくなるから困る」のである。

そのあとデイサービスでの老父母の経験の描写、かつての団欒、歳時記にまつわる食物の記憶などの小春日和の刻、それも永つぎせず老父母の悲惨な諍いがはじまる。「私」はここに立ち入って、間もなく六十になる息子が米寿を迎えた母と卒寿を過ぎた父への夫婦仲について意見している。しかもこんな真夜中に。三十年後の私はどうだろう。そんな歳になっても妻と喧嘩して、初老の息子にたしなめられるのだろうか、と想ってしまう。

老母と妻との会話のなかで老母としては不本意な結婚であったこと、七十年の夫婦のくらしを経て記憶はよみがえりこの諍いに凄まじい翳りを落しているともよめる処がある。さらに妻と老父との金銭トラブル、老人呆け、被害の妄想によるときがたい確執、そして妻は私と口をきかなくなる。介護の困難の増すなかで申し込んでいた四泊五日のショートステイの利用となる。しかし私と妻はこじれてふともらした妻の吐息、怒りの噴出、そこには私を睨み据えた女は、妻であって妻でなかった。私と年老いた

両親の間にいる邪魔者、投げ出してしまえ、俺がやる。あの二人が生きている限り、血の繁りの絶でない俺がやると激昂に至る。老母のまだらボケがひどくなった。妻は「軀つきがいつそう骨張り、目が憑かれたように光り、女の匂いが失せて、母の介護に自分をかけているようだ。二人三脚、いづれ寝たきりになるだろう母と、共倒れするつもりなのか」と。「私」が介助を試みる。老母のオムツ交換、「左の太股がわずかに動き、膝を少し立てて、母は隠そうとした。介助なしには生きられない八十八歳の母が、息子の私に見せた生身の女の羞恥の仕種だった」と。「ばあさんが狂つちまった」老父の電話「はあさんが」と父はいった。「紐でわしの首を絞めたんだ。怖くて、寝ていらねえ。」この老母の憎悪のようなものにも遠い日の老父にかかわる昏い性の記憶がよみがえる描写がある。ついに老母は狂つた光がきらめいて覗き込む父をシッシツと声に出して追い払うことになる。

ある日、黄落の刻に老母は自分から食絶ちして、自死の方法を選んだことを知る。老母のさいごのコトバは「……結婚していないのよ」であった。医師もこの老母のゆるやかな自死を容認する気配であった。めいわくはこれ以上かけられないと思ひ、手肢を抑制されたこの日々での薄明のようなやさしい少女にかえつたようなすき通つた老母の自死へのあゆみはこの作品のもっとも印象ふかい処である。そしてその死、「葬送」「しかし老母の死の直後にきた妻との離婚のこともからむ破局に近い断絶の光景、スベイン旅行をともしてのそこからの回復、老父の特別養護老人ホー

ムへの入所、入所中の老父のしぐさ、そしておなじく入所の八十の老婆への執着や交際、「老骨」の果てに、死を口ばしる老父への夫婦のおびえ、長い人生、艱難辛苦をかくぐつて来た。忘れたいことは忘れて、守るべきところは頑固に守り、都合の悪いことにはとほけて、老いの寂しさの中で極楽トンプボに生きなければ、父のように長生きはできないだろうと。老父は特別養護老人ホームでは「おとほけチャンピオン」といわれたいらしい。滑稽と気味の悪さのしたたかな同居、「私」は父に「老怪さん」と諷名をつけた。すぐとなりに妻がいるかのように老怪さんを施設に送る車中で（根くらべなだけど、自然にまかせるほかないね）という独白でこの作品は終っている。

MEMO — IV —

文学作品には「虚実皮膚の間」ということがある。そこを読みとっている。じつは、福祉の現場はこの虚と実の皮膚のあいだを視ていると思う。たまたまに出会つた作品、「黄落」のプロットを点綴してみたがケース記録とよみかえて重く充填された福祉に提起される主題にみちている。記憶とか、人間的な想像力が働いてこそはじめて福祉の意味が測れるはずである。仮説してみたことであるがここを意図的に扱えないものか。

老醜、老残、この作品で、ついに老母に首を絞められ死に瀕する老父が描かれているが、それを「老怪」とよんでいる。および、福祉の情報にはほとんどみかけない表現である。福祉の研究

にとつて文学作品のこれらの一れんの表現と文脈のはこびを深くよみとる必要がある。平板で表層の描き方で老いの真相に迫れるものではない。それには表現の重さ、どう描き切れるか。それは状況理解の通路である。文学作品が提起している世界に対して福祉の研究、実践のサイドからもあらためて、その視られた現実理解をどのように扱うかについての検討がもとめられているのではないか。

いずれのことも「表現」にかかわっている。このあたりは福祉研究、実践のやりとりのなかではあまり留意されていない、せいぜい、差別表現について消極的な扱いが多い。筒井康隆氏の断筆宣言をめぐる議論の深め方も不足していた。コトバとか記号へのセンスについても文学作品からの学びは大切である。

古井由吉氏の『平日寂寞』（九四年四月。講談社刊）のなかで、たとえば情報としての愛用される「お年寄り」について、古井氏は私は好まないといっている。「老人」でいいではないかという。「おたくのご老人」「うちの年寄り」これが正しい用法、「年寄り」には老人サイドのへりくだりの意がある。「年寄りの冷や水」他人の口から出た容赦のないものだ。それなのに「お」の字をたてまつって、なれなれしく呼びかけるのは、いかがなものかといっている。その心は見え透いている。「若い」というものを忌み嫌っている。しかし生老病死はひとつのつながり一体のもの、「生」即ち「老」なのだ。このあたりのセンスである。さらに一つの批評、今の世では若づくりして、若い言動に走り、若い者に立ち

まじってはしやぎながら、幼さと老醜ばかりを感じさせる姿はよく見受けられる。皆それぞれ、いささかは自身の鏡として眺めたほうがいい。今の人間は円熟しにくく老けやすいようだ。幼いものは老けやすい。そして幼さとは、自分にとつて不可避なものから逃げまわることである」と。そこで「長寿社会」など平気でつかう。まことにおぞましく、ときに使い方によつては反福祉的でさえある。

私は山本夏彦氏のコラムや随想を愛読していてその思考と表現にはとどする。「人間五十年下天のうちをくらぶれば夢まぼろしの如くなり、と信長はうたいました。私は人間やっばり五十年だと思つています。いまもむかしもこれが自然のサイクルで、その五十年がみるみる六十年に七十年になつて、いまやそれを超えたというのは、もしそれが本当なら不吉だと言われなければなりません。私は、私は眉ツバだと思つています。この世の中がうまく運転するには、ある程度の欠乏がなくてはなりません。欠乏がないでなければなりません。今日ほど死ぬことがむずかしくなつた時代はこれまででなかったと思います。」「以前私たちはめつたにながわらずいしませんでした。ながわらずいしたのは多く裕福な人で、貧乏人は昨日まであんなに元気だったのに、そんな年でもないので、惜しまれて死にました」……（山本夏彦「つかぬことを言う」一九八〇年・一月・平凡社刊）

福祉サイドの計画策定にしろ、相談援助の技法にしろ、これら

の発想と表現をいちどかいくぐってから提起した方がいい。こうした文学的発言から有効適切な対応が直接にでてくるものではない。しかし本当に思考し現場に立ち合っているならばこのていどことは了解したうえで話だといっている。そして記憶や想像力を大切にすることもある。

『黄落』のなかで、「おばあちゃん……」私は母の白髪を髪に口を埋め、耳もとで呼びつづけながら、こわばった軀の芯から伝わってくる母の狂気を押さえ込もうとした。長過ぎるほどの父との人生で、父を恨みつづけてきただろう不幸な母の、血の魂を私は感じた。朦朧とした老いの頭の中が、その女の血で血ぶくれしているのだ。「これらのことも人間ののつびきならぬ業のようなものである。」

“黄落”という詩の余韻にかよう表現と老母の生の尽きる刻を作者は“満開の桜の下に屍体が埋まっていると書いたのは私の敬愛する小説家（坂口安吾のこと・小倉）だが、私は樹木の鮮やかな紅葉に自然界の狂気を感じた。やがて落葉する木々が束の間、燃えたつ彩りに狂っているのではないか。”と老母の死をみつめての心象風景となっている。老いの果ての描写として私たちの記憶にかさねて実に鮮烈である。

なお、佐江衆一氏は昭和九年、東京生まれ、コピーライターを経て、一九六〇年以降作家として多くの作品を発表、芥川賞候補の作家でもある。ここにとりあげた『黄落』はドウ・マゴ文学賞をうけた。『黄落』のテーマよりさらにきびしい老親の扼殺、自

殺幫助と家族の絡みを扱った『老熟家族』（一九九六年二月・新潮文庫）のあることも付記しておきたい。

研究ノートとしてきたがきわめて散乱したメモになってしまった。私としては、いろいろの文学作品についてこうしたメモをとりながら文学と福祉のあいだをつなぐ仮説Vのてがかりをこれからもみつげたいと考えている。

(1996・2・10)